



# みんなの 文化財図鑑

天然記念物編



おきなわの文化財について学ぼう!

沖縄県教育委員会

# みんなの 文化財図鑑

天然記念物編





# まえがき

『みんなの文化財図鑑』は、県内に存在する国指定文化財、県指定文化財と埋蔵文化財等について、その概要を紹介する手引書として、2017（平成29）年度から分野別に刊行しています。

文化財とは、大切に伝えられてきた文化的な財産のことで、歴史上又は芸術上価値の高いものをいいます。むかしの文化的活動について、現在の私たちが直接、目にすることは出来ませんが、文化財を学ぶことで、時代ごとに人々がどのように生活していたかを知ることが出来ます。多くの文化財の中でも、価値の高いものについて、国や県、市町村は文化財保護法という法律などに基づいて指定し保護しており、美術工芸品のほか建物や芸能、動植物など様々なものが指定されています。

沖縄県は、亜熱帯海洋性気候の下、160の島々から構成され、他の都道府県とは異なる自然環境を有しています。

そして私たちの祖先は、この豊かな自然環境の中で、独自の歴史と文化を築いてきました。こうした環境を子や孫に引き継ぐためには、天然記念物を含む、地域の自然とそれにまつわる文化を守り、人々の自然観や地域とのつながりを育むことが大切です。

最終編となる『みんなの文化財図鑑 天然記念物編』は、沖縄県の文化財のうち天然記念物について、図や写真を多く取り入れて分かりやすく紹介しています。文化財について多くの方々が理解を深め、より一層の文化財保護と活用のために本書がこれまで刊行した4冊とともに利用される事を切望いたします。

令和4年3月  
沖縄県教育委員会  
教育長 金城 弘昌

# 目次 Contents

まえがき ..... 3

## I. 天然記念物

概要 .....	9
教えて!?天然記念物Q&A .....	10
琉球列島の生い立ち .....	13
沖縄本島北部及び周辺離島の天然記念物	14
沖縄本島中部及び周辺離島の天然記念物	56
沖縄本島南部及び周辺離島の天然記念物	60
宮古諸島の天然記念物 .....	90
八重山諸島の天然記念物 .....	106
地域を定めず指定する天然記念物 .....	137
市町村指定文化財(天然記念物)一覧表	192

## II. 資料

県内博物館・美術館・資料館一覧 .....	196
県内公共図書館一覧 .....	200
掲載天然記念物一覧(五十音順) .....	206
引用文献・参考文献一覧(五十音順) .....	208
文化財の体系図 .....	210
あとがき .....	213



## 八重山諸島



伊平屋島

野雨島

伊是名島

慶弼親島

本島北部及び  
周辺離島

久米島

栗国島

渡名喜島

慶良間諸島

座間味島 安室島

屋嘉比島

儀志布島

阿嘉島

前島

久場島

渡嘉敷島

慶留間島

外地島

本島南部及び  
周辺離島

伊江島

古宇利島

水納島

屋我地島

瀬底島

58

本島中部及び  
周辺離島

宮城島

伊計島

平安座島

浜比嘉島

津堅島

北大東島

南大東島

久高島

58

329

330

331





# はん れい 凡 例

1. この本は、沖縄県内に所在する国と県が指定した文化財のうち、天然記念物について写真とともに解説し、併せて令和3年5月時点の市町村指定文化財（天然記念物）の一覧表を収録したものです。
2. 写真と天然記念物を解説したページ（以下「本文」）は、原則として所在する市町村別にまとめ、さらに地域別にまとめています。ただし、地域を定めず指定されているものについては、一括して後半のページでまとめました。
3. 本文は、指定区分、指定の種別、天然記念物名称と写真及び解説で構成しています。
4. 指定区分及び指定名称の種別は次のとおり。  
指定区分：「国指定特別天然記念物」「国指定天然記念物」「県指定天然記念物」  
指定の種別：「動物」「植物」「地質鉱物」「天然保護区域」
5. 天然記念物の名称のふりがなは一般的な呼称です。また、本文中のふりがなは、固有名詞や地名などを除き、方音（方言による発音）によるものをカタカナ表記としました。
6. 本文中に出てくる年号は、西暦を基本として表記しました。
7. 用字・用語については、常用漢字の使用を原則としましたが、文化財の表現上やむを得ないものについては例外としました。
8. 生息場所については、別枠の中で島を単位として記述し、必要に応じて沖縄県内の島にとどまらず、琉球列島における分布及び関連する地域について示しました。
9. 指定物件の指定経過がわかるように、別枠の中でその変遷をまとめました。
10. 本書の編集は、沖縄県教育庁文化財課が担当しました。





# 概 要

天然記念物とは、動物、植物、地質鉱物のうち学術的に貴重で、かつその地域の自然を記念するものを保護する目的で、法や条例に基づき指定された文化財を指します。これらのなかには、生き物や地質鉱物のほか、動物の生息地や繁殖地及び渡来地、植物の自生地や特異な自然現象の生じている土地なども含まれます。

沖縄県内の天然記念物は、2021（令和3）年5月現在で国指定 56 件、県指定 50 件、市町村指定 123 件、合計 229 件があります。これらを分類すると、国指定では動物 22 件、植物 23 件、地質鉱物 7 件、天然保護区域 3 件、植物・地質 1 件、県指定では動物 18 件、植物 25 件、地質鉱物 5 件、天然保護区域 2 件、また、市町村指定は動物 5 件、植物 98 件、地質鉱物 18 件、天然保護区域 2 件の計 123 件となっています。

その歴史を紐解くと、戦前には、史蹟名勝天然記念物保存法により「ちすじのり発生地」と「宜野湾街道ノ松並木」の 2 件が指定されています。戦後、1950（昭和 25）年には国において文化財保護法が制定され、保護が進められましたが、当時アメリカの統治下にあった沖縄県は対象外となっていました。

沖縄県では 1954（昭和 29）年に琉球政府文化財保護委員会が発足し、活動がはじまりました。その後 1955（昭和 30）年にはノグチゲラ、ケラマジカ、ジュゴンをはじめとする計 9 件が指定されたことにより、本格的な天然記念物の保護行政がスタートしました。

その過程における歴史的な出来事として、1959（昭和 34）年に「今帰仁街道の琉球松並木」がマツクイムシ等の被害に遭い指定解除になったことがあげられます。また、1965（昭和 40）年にはイリオモテヤマネコの発見およびその指定がありました。結果的に、琉球政府時代の指定件数は、動物 8 件、植物 32 件、地質鉱物 3 件の計 43 件となっており、1972（昭和 47）年 5 月 15 日の日本復帰までに数多くの指定が進められました。

復帰後は、琉球政府時代に指定されたもののうち 21 件が国指定となり、その後も指定が進められた結果、2021（令和 3）年 5 月現在では、前述したように国、県、市町村指定の合計が 229 件にまで増加しています。

琉球列島は、その昔、アジア大陸の一部であった時代もありましたが、幾度かの地殻変動を経て現在の孤状列島になったといわれています。沖縄県は琉球列島に含まれ、亜熱帯海洋性気候のもと、地史的にも特異な多くの島から成り立っています。これらの自然の複雑な相互作用により、わが国においても他に類をみない自然環境が作りだされました。その結果、多くの固有種や環境を生み出すことになったのです。私たちの祖先はこの多様な環境のもと、生活に身近な自然から恩恵を受けるとともに、畏敬の念を抱きながら常に自然と関わり過ごしてきました。このような自然現象の特異性と、そこで育まれた文化などが相まって形成されたものが、天然記念物として指定されているのです。

## 教えて!? 天然記念物Q&A

Q1. 沖縄の気候の特徴って、どんなところ?

A: 「亜熱帯海洋性気候」と呼ばれる暖かくて湿った地域です。

沖縄県と同じ緯度にある地球上の亜熱帯地域の多くは、乾燥した地域です。しかし沖縄県は年間の気温差もあまりなく、雨の比較的多い恵まれた地域となっています。このような亜熱帯地域にありながら、雨に恵まれた地域となる要因の一つとして、沖縄の近くを流れている「黒潮」があります。



Q3. 潮間帯ってどんなところ?

A: 満潮時には水没するが、干潮時には干上がる場所のことです。

潮間帯には多くの生き物がくらしており、複雑で豊かな生態系をつくっています。潮間帯のうち、泥が溜まるような場所では、沖縄の場合、マングロープが発達することもあります。イリオモテヤマネコも、潮間帯に発達するマングロープをよく利用することで知られています。

Q2. 沖縄には、なぜ珍しい生き物が多いの?

A: 数百万年前から断続的に「島」となったことと、地質的条件がポイントです。

もともと大陸の一部だった琉球列島は、早い時期に大陸や日本列島から海で隔てられて「島」となりました。そのため、他の地域では絶滅してしまった「遺存固有種」や、そこで進化した「新固有種」が多く生息しています。また南方系の動植物が多いのも特徴です。



今の琉球列島は大陸の一部でした。



早い時期に大陸や日本列島から分れました。



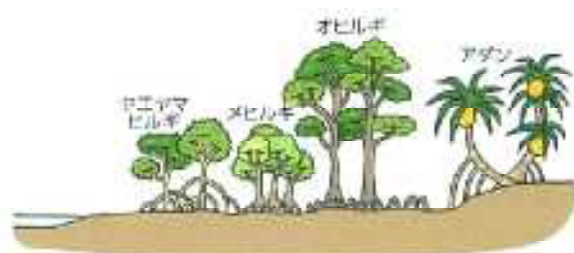
仲間川天然保護区域(竹富町西表島)の下流域。干潮時に底面が露出している状態。一見、何もいないように見えるが、多くの生き物が生息しています。



#### Q4. マングローブってなに？

A: 熱帯や亜熱帯地域の河口付近に広がる植物群落の総称です。

マングローブの主な構成種として、オヒルギ、メヒルギ、ヤエヤマヒルギなどのヒルギの仲間がありますが、その他にもイボタクサギ、シマシラキ、アダンなども構成種となります。マングローブの植物は、海水が入り込み、しかも泥湿地という特殊な環境で生育するため、独特な樹形をしているものや、塩類を体内から排出するしくみに工夫を凝らしているものが多いです。



#### Q6. 天然記念物と希少種は、どう違うの？

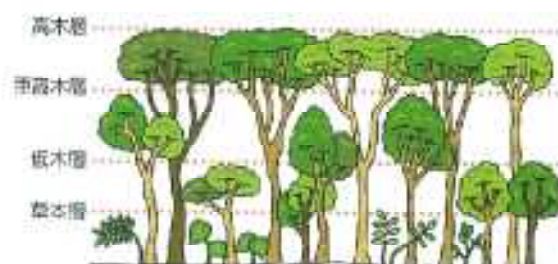
A: 「天然記念物」＝「希少種」とは限りません。

天然記念物の中には、数が少なくめったに見ることができないものもありますが、全てが「数が少ない」というわけではありません。天然記念物は「学術的に貴重で自然を記念する」もの、平たく言うと「学術的及び文化的な側面」があります。例えば天然記念物の「名護のひんぷんガジュマル」や「首里金城の大アカギ」などは、木の種類としては一般的なガジュマルやアカギですが、地域の歴史や文化と関わりがあり、古くから大切にされてきたため天然記念物として指定されています。

#### Q5. 森の階層構造って？

A: 森の中でみられる植物が、高さを違えて生育している構造です。

長い時間をかけて成長した森では葉が生い茂るため、地面に近づくほど暗くなります。このような場所では、ふりそそぐ光の強さの違いに応じて植物が高さを「すみ分けて」生育している様子が観察できます。一番高いところから地面近くまでを順に並べると、大きく「高木層」「亜高木層」「低木層」「草本層」に分類されます。



#### Q7. 天然記念物は動物だけじゃないの？

A: 動物だけではなくあります。

天然記念物は、大きく「動物」「植物」「地質鉱物」「天然保護区域」の4つに分けられます。



Q8. 国指定や県指定の天然記念物の違いってなに？

A：指定する機関と法令（法律・条例）が違います。

国指定の天然記念物は、国の機関である「文部科学省」が「文化財保護法」に基づいて指定します。一方、県指定の天然記念物は、「各都道府県の教育委員会」が「文化財保護条例」に基づいて指定します。

ちなみに、各市町村の教育委員会にも同じような条例があり、これに基づき天然記念物が指定されています。ぜひ、自分がくらす市町村が指定している天然記念物も調べてみてください。

【沖縄県の天然記念物】

国指定天然記念物 法令：【文化財保護法】
例：ヤンバルワイナ 首里金城の大アカギ 屋立天然保護区域
県指定天然記念物 法令：【沖縄県文化財保護条例】
例：コノハチヨフ 牛根の大ソテツ 与那国豊久部良岳天然保護区域

Q9. 天然記念物はどんなことが禁止されているの？

A：人の手を加えることは基本的にダメです。

天然記念物は「現状を変更することが制限」されています。つまり「自然状態のまま」が基本です。例えば、天然記念物の動物を許可無く捕まえることや、触れることもダメです。また天然保護区域や自然保護区では、すべての動植物のみならず、石や土についても採取や移動はできません。

Q10. 天然記念物ってなに？

A：文化財の一つです。

文化財を大まかに分類すると、「有形文化財」「無形文化財」「民俗文化財」「記念物」となります。天然記念物は記念物の中に分類されます。

※詳細は210～211ページの「文化財の体系図」にあります。



## 琉球列島の生い立ち

沖縄県にはたくさんの固有種がありますが、その理由は琉球列島の形成過程にあります。

### ●1600～600万年前：中国大陸の一部

琉球列島は中国大陸の一部であったため、将来琉球列島になる場所にも大陸と同じような先祖の生物がいました。



### ●500～200万年前：中国大陸からの分離がはじまる

約500万年前頃、しだいに琉球列島の島々が形づくられます。中琉球（沖縄諸島と奄美諸島）はトカラ海峡の形成などにより、大陸から分断され孤立した期間が長かったので、その地域で見られない「固有種」がたくさん生息しています。例としては、リュウキュウヤマガメ、ハブ、キクザトザワヘビ、イシカワガエル、イボイモリ、ノグチゲラ、ケナガネズミ、トゲネズミなどです。



### ●150～20万年前：広大なサンゴ礁の形成

海面が高くなり、琉球列島はいくつかの島々に分かれます。島の周辺には広大なサンゴ礁が形成されます。これが現在の琉球石灰岩となります。この頃、大東諸島が海面上に現れます。さらにケラマ海裂が深くなり、南琉球（宮古・八重山諸島）と中琉球は分離していきます。ただし、氷期等の繰り返しで、たびたび大陸と地続きになった時期もあったとされます。



### ●20万年前～現在：現在の琉球列島の原型

現在の琉球列島の島々の配置に近づきます。9万年前の氷期に大陸と地続きとなったとき、イリオモテヤマネコが渡ってきたとされています。また、現在のサンゴ礁やビーチロック（板干瀬）、海岸の岩などのノッチがこの頃から形成されます。



※琉球列島の形成過程には諸説あります。



## 本島北部及び周辺離島



地域を定めず指定の天然記念物(本島北部及び周辺離島)

- ⑧ コウノトリ(p138)
- ⑨ ノグチゲラ(p140-141)
- ⑩ アカヒゲ(p146-147)
- ⑪ オカヤドカリ(p148-149)
- ⑫ ジュゴン(p152-153)
- ⑬ トゲネズミ(p155)
- ⑭ ケナガネズミ(p156-157)
- ⑮ カラスバト(p160)
- ⑯ イイジマムシクイ(p165)
- ⑰ ヤンバルクイナ(p166)
- ⑱ リュウキュウヤマガメ(p168-169)

- ヤンバルテナガコガネ (p170-171)
- フタオチョウ (p172)
- コノハチョウ (p173)
- イボイモリ (p175)
- クロイワトカゲモドキ (p176-177)  
(マダラトカゲモドキを含む。)
- ホルストガエル (p180-181)
- ナミエガエル (p182-183)
- イシカワガエル (p184-185)
- アマミヤマシギ (p187)

- 万座毛石灰岩植物群遷 (p46-47)





道路凡例





# あは 安波のタナガーグムイの植物群落

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 国頭村字安波

DATA

## 指定経緯

1959(昭和34)年12月16日、琉球政府指定「安波のタナガーグムイ植物群落」

タナガーグムイは、国頭村の普久川の下流近くにある大きな池のことです。方言で、テナガエビのことを「タナガー」、池のことを「クムイ」と言います。つまり「テナガエビがたくさんいる池」という意味です。昔からテナガエビがたくさんいることで知られていたのでしょう。

タナガーグムイの周辺の河川敷はいつも湿っていて、大雨が降ると流水で洗われます。そのため、ここで生育する植物を観察すると、水の流れに対していろいろ工夫をこら

しているのが観察できます。

例えば、リュウキュウツワブキやナガバハグマなどは、水圧を避けるように葉を細長く変化させています。

安波のタナガーグムイでは沖縄島の他の河川では見られない環境があるため貴重な植物がたくさんあります。



タナガーグムイ





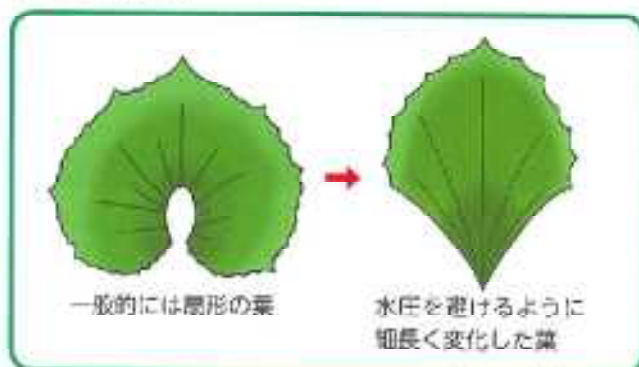
指定地はクムイの周囲だけでなく、隣接する河川敷も含んでいます。



指定標柱



クムイ上流側の淵



リュウキュウツツブキの葉の形の変化



# 与那覇岳天然保護区域

指定年月日:1972(昭和47)年5月15日 所在地:国頭村字比地反尾・同字奥間大保謝原

## DATA

## 指定経緯

1956(昭和31)年10月19日、琉球政府指定

[国頭村与那覇岳九合目以上の植物群落]

1976(昭和51)年12月23日、追加指定

1994(平成6)年8月15日、追加指定

海拔500mの与那覇岳とその周辺地のうち、海拔450m以上の山林が天然保護区域として指定されています。与那覇岳周辺は、亜熱帯を代表するイタジイの森林で、ここでは104科378種の植物が知られています。谷間にはイタジイに混じって、ウラジロガシやイスノキなどの林も見られます。また雨の多い地域なので、湿度が高く、コケやシダ、ランなどの、樹木にくっついて生活する植物も多いのです。

与那覇岳の森林は、ノグチゲラやヤンバ

ルフィナなど、沖縄の貴重な動物たちのすみかでもあります。ここで見られる動物は、陸上せきつい動物が37科74種、昆虫類やクモ類、ムカデ類、ヤスデ類などをあわせると3000種類を越えると言われています。沖縄島の代表的な生きものや、生物多様性を保全する上からも重要な地域です。



与那覇岳全景



樹木についたコケ



頂上付近の様子



## 与那覇岳の生き物



ヤンバルクロギリス

\*



コバノミヤマノボタン

\*



リュウキュウハゴロトンボ

\*



サクラツツジ

\*



リュウキュウウラボシシジミ

\*



ヤッコソウ

\*



# あは 安波のサキシマスオウノキ

指定年月日: 1959(昭和34)年12月16日 所在地: 国頭村字安波

DATA

学名 *Heritiera littoralis*

サキシマスオウノキは、東アフリカ、ポリネシア、東南アジアから琉球列島にかけて分布する樹木で、琉球列島では鹿児島県の奄美大島以南に生育しています。河口域の湿地でマングローブの陸側に生育しますが、標高の高いところでも群落が見つかる例があります。体を安定させるため直角三角形をくねらせたような板根が発達するのが特徴です。実は長さ6cmぐらいのゆがんだ楕円形で、中央には縦に走る筋状の突起があり、ウルトラマンの頭を連想させます。

安波のサキシマスオウノキの大きな個体は

3本で、北側と中央の木は樹齢250年と推定されています。墓地に生えている北側の個体は第二次世界大戦頃の暴風で根本付近から折れてしまいましたが、3本のひこばえがかなりの大きさに育っています。中央の個体は、アコウに絡まれて衰弱していましたが、2003年3月にアコウが除去され樹勢を回復しました。一番南側の木は若い個体で板根の広がりが見事です。



北側の個体。ひこばえは4本ありましたが、最も安波川に近い側のひこばえ(矢印)は折れてほぼ枯死しています。



中央(写真左)と南側(写真右)の個体



サキシマスオウノキの実

用語の解説

ひこばえ

樹木の根元から伸びた芽が成長したもの。



# 比地の小玉森の植物群落

指定年月日: 1991 (平成3) 年4月2日 所在地: 国頭村宇比地

国頭村

国頭村比地の小玉森の植物群落には、**胸高直径**が1.7mにもなるアカギの巨木をはじめ、フクギやホルトノキ、タブノキ、クスノハカエデなどの高木が生えています。亜高木としてはリュウキュウガキやフクギ、ヤブニッケイなど15種があり、低木にはクロツグやナガミボチョウジ、シロダモなどが生育しています。そして、これらの木の下にはオオイワヒトデ、ホシダなどのシダ類を中心に58種の

植物が見られます。

小玉森は比地集落の発祥地と推定され(仲原, 2007)、村人たちが大切に保護してきた聖域です。旧暦7月盆明けの最初の亥の日には海神祭が行われますが、これは山の幸、海の幸、五穀豊穡、人々の無病患災を祈願する大切な神事です。小玉森の植物群落は、人々の暮らしや信仰と関連した**里山林**としても貴重なものです。



植物群落と神アサギ

## 用語の解説

### 胸高直径

樹木の幹は、一本の木のどこを測っても同じ太さというわけではない。そのため、幹の直径を測るときには、地面から約1.2mの高さを測ることが決められている。このようにして測った幹の直径を胸高直径という。

### 里山林

集落近くにあり、地域住民の生活と結びついて維持・管理されてきた森林。



アカギの太木

県指定天然記念物

植物



# たみなとうがん しょくぶつぐんらく 田港御願の植物群落

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 大宜味村字田港御神上原

DATA

## 指定経緯

1955(昭和30)年1月25日、琉球政府指定  
「田港御願の植物群落」

大宜味村の田港御願の植物群落は、塩屋湾に面した田港集落の東側にある田港御願を包み込むように、集落のふもとから高さ約130mの山の斜面にかけて広がる鬱蒼とした深い森です。ここでは主に琉球列島の古生層の石灰岩地域を特徴づける植物の集団が見られ、代表的な樹木はアカギ、クスノハカエデ、ハマユズビワ、ガジュマルなどです。また指定地最上部の小さな面積に非石灰岩の場所があり、そこではイタジイやオキナフウラジロガシの巨木が見られます。このよう

に、指定地の大部分で石灰岩地域の植物が見られる中、頂上部では非石灰岩地域の植物が見られるのが、この植物群落の特徴です。

田港御願は昔から神事が行われてきた御嶽で神聖な場所です。地元の人々が周辺一帯の森を大切にしてきたおかげで、現在まで手つかずの状態を守られてきました。



田港御願全景





田港御嶺上部から地蔵湾方面を望む



指定標柱



植物群落の説明板



# 大宜味御嶽のビロウ群落

指定年月日: 1974(昭和49)年2月22日 所在地: 大宜味村字大宜味

DATA

ビロウは、海岸斜面などの潮風の強い場所に生える植物で、伊平屋島や南北大東島、与那国島などにはよく発達した林があります。沖縄島ではそのような林は少ないのですが、その中であって大宜味御嶽のビロウ群落は一番大きく代表的なものです。ビロウ(方言名: クバ)は、沖縄では神と地上をつなぐ木と見なされてきました。

大宜味村役場南東の大兼久川沿いにあるこの群落は、森全体が聖地で、木を切るとは勿論、枯木を拾うことさえ許されず、これ

学名 *Livistona chinensis*

に違反するとバチが当たると信じられてきました。

大宜味御嶽の植生は4つの階層に分かれていますが、高木層、亜高木層、低木層のいずれにもビロウが出現します。ビロウの高さの上限は環境によって違っていて、風が強く乾燥した場所では3mほどですが、風の弱い谷間では13mにもなります。



大宜味御嶽とその周辺に見られるビロウ





高さ10m以上に成長したビロウ



林内から見上げた樹冠の様子。  
葉を広げたビロウが光を遮っています。

ビロウは、  
神が地上に降りる  
ハシゴとも  
言われます。



林床の様子。ビロウの幼木  
(写真中央)が育っています。



# 喜如嘉板敷海岸の板干瀬

指定年月日:1974(昭和49)年2月22日 所在地:大宜味村字喜如嘉

「板干瀬」は、沖縄の海岸にある平たい岩のことで、ビーチロックとも呼ばれます。熱帯・亜熱帯域の潮間帯にある砂浜にできる例が多く、大抵は海側に少し傾いています。炭酸カルシウムがセメントの役割をして砂礫などを固結しますが、時にはガラス瓶などの人工物が混じっていたりするので、数十年程度の短時間でも形成可能なことが分かります。

大宜味村にある辺土名高校の北側地先から喜如嘉集落入口にかけては、道路が真っすぐで、景色に変化がないため、昔「イニブイドー(居眠り道)」と呼ばれた海岸道があります。

板敷海岸のビーチロックはこの道と並ぶように波打ち際の約1kmに渡って形成されています。

「板敷」という地名は、ビーチロックに由来するものです。ビーチロックは、建材として手ごろな厚さのものが多く、コンクリートが普及する前は、屋敷の塀や橋の材料として盛んに使われていました。板敷海岸のビーチロックにも昔切り出した跡が見られ、かつて人々にとって身近な存在だったことを示しています。



辺土名高校方面から見た板干瀬(波打ち際の褐色部分)





喜如島集落方面から見た板干跡。指定標柱は指定地西端（写真の右奥）に設置されています。



ビーチロックは海側に傾斜しています。

★



ビーチロックの断面。砂と礫が固まっています。



石材を切り出した跡

★



波浪で割れたビーチロック

# げ さ し わん りん 慶佐次湾のヒルギ林

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 東村字慶佐次港原地先より下流部分

DATA



指定緑地

1959(昭和34)年12月16日、琉球政府指定

東村の慶佐次川の下流部から河口にかけて、沖縄島では最大規模のマングローブが広がっています。河口域にはヤエヤマヒルギ、マングローブの中央域にはオヒルギが、上流側や陸地との境にはメヒルギが多くみられます。ここには3種類のヒルギが生育していることから、それぞれの葉、幹、根の違いが観察できる最適な場所です。

マングローブとは熱帯から亜熱帯地域の汽水域に発達する林のことで、主にヒルギ類が林をつくっていることから、ヒルギ林とも

呼ばれます。ここではヒルギ類の他にも、イボタクサギ、アダンなどが構成種として生育しています。

また、このヤエヤマヒルギは、分布の北限にあたるほか、マングローブと陸上植物との境に生えるサキシマスオウノキについても、大きな群落が生育する北限となっています。

国指定天然記念物

植物



慶佐次川のマングローブ（満潮時）





豊佐次川のマングローブ (干潮時)



ヤエヤマヒルギの根は「支柱根」と呼ばれます。



オヒルギの根は「腔根」と呼ばれます。



オヒルギの胎生種子



メヒルギの胎生種子



メヒルギの根は「板根」と呼ばれます。



# 諸志御嶽の植物群落

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 今帰仁村字諸志・同字与那嶽

DATA

## 指定経緯

1955(昭和30)年1月25日、琉球政府指定「諸志御嶽の植物群落」

今帰仁村にある諸志御嶽は、「琉球国由来記」(1713年)に「ムコリガワ嶽御イベ」と記され、地元では「ムクンジャノウガン」、「シクジャウガミ」などと呼ばれてきました。諸志、与那嶽両集落の神山として昔から樹木の伐採が禁じられ、鬱蒼とした林内には、アカギ、ムクロジ、クスノハカエデ、リュウキュウマツなどの大木が生えていました。

今帰仁口説に「水にまかる諸言田村しばし歩めば神山の大松二本たち並で」という文句があり、昔はリュウキュウマツが目立っていたことが伺えます。諸言田村は1903年に志慶真村と合併して諸志になったので、この歌は100年以上前の作でしょう。

現在、リュウキュウマツは見つけるのが難しくなっています。リュウキュウマツは陽樹なので、鬱蒼とした森林内では稚樹が育たず大木が枯死すれば減少していくことになります。面白いのはムクロジ(方言名:ムックジ)で、沖縄では稀な植物ですが、この森には多数の巨木が生育しています。「ムクンジャ(ムコリガワ)」は御嶽内を流れている川で、その名はムクロジが多いことに由来するという説があります。



諸志御嶽の植物群落全景





ムクロジ



リュウキュウハリギリ



アカギ



与那嶽と読志の境を流れる「ムクンジャ(ムコリガワ)」。「フキンジュ」とも呼ばれます。

\*

## 用語の解説

### 今帰仁口説

口説(くどっち)は本土風の七五調の句を連続させつつ、物事を表現する歌である。その内容は、旅行、恋愛、戦争、教訓等多岐にわたるが、各地方の風景や特産物等を紹介する「ご当地ソング」的なものが多い。今帰仁口説も後者のひとつと考えられる。

### 陽樹

常に太陽光が降り注ぐような明るい場所で生育する植物。光を返るものがないような場所では、どんどん成長するが、日陰では生育できない。

### ムクロジ

ムクロジの実には石けんの作用がある。また種は正月の羽根つき遊びの黒い玉の材料として利用される。





# 天底のシマチスジノリ

指定年月日: 1955 (昭和30) 年1月25日 所在地: 今帰仁村字天底

## DATA

学名 *Thorea gaudichaudii*

指定経緯

指定時の名称「しまちすじのり」

1975 (昭和50) 年8月7日、現名称に変更

シマチスジノリは、マリアナ諸島、フィリピン、沖縄島、宮城島、鹿児島県与論島の淡水に生息する紅藻類で、1800年代のはじめに、フランスの植物学者シャルル・ゴードイショー＝ボープレがマリアナ諸島で発見しました。

シマチスジノリが育つには、石灰岩の多い場所であることと、豊富に湧き出るきれいな水と適度な太陽光が必要です。沖縄県・鹿児島県の発生地はいずれも湧水井戸です。モズク（方言名：スヌイ）に似ているため沖縄では「カースヌイ」と呼ぶ地域もあります。

天底のシマチスジノリは、1931年に天底尋常高等小学校訓導の大城長二郎が発見しました。当時地元では「変な藻」と言われ、井戸さらいの時には剥ぎ取っていました（仲原, 1999）。かつては職名園育徳泉のシマチスジノリより生育が良いと言われましたが、最近ではアミスガーの湧水量が減ってきており、水の透明度が低いこともあり観察が難しくなっています。



アミスガー



指定年月日:1956(昭和31)年10月19日 所在地:今帰仁村字今泊

## DATA

学名 *Terminalia catappa*

指定経緯

指定時の名称「今帰仁村親泊のこばていし」

1975(昭和50)年8月7日、現名称に変更

このコバテイシ(別名:モモタマナ)は、  
推定樹齢400年、沖縄島最大の個体と言  
われています。今帰仁村今泊公民館の前に  
あって、長い間人々の暮らしを見守ってきま  
した。かつて、子どもたちは大枝に登って  
遊び、風の吹いた後に実を拾うのが楽しみ  
だったそうです。コバテイシの実<sup>じゅうく</sup>は熟すと甘  
酸っぱく、種子には落花生のような風味が  
あります。雨乞いの儀式では、神人が今帰  
仁城でのお祈りを終えて戻ってくると、村人  
たちが木の枝に水をつけてかけます。やが  
て、村人同士のかけ合いとなりますが、コ  
バテイシの下は特に盛大にかけ合う場所の  
一つでした(新城, 2001)。

1976年7月の台風9号では、幹が裂けて  
倒木の危機が迫りましたが、今泊の人々が  
暴風の中、枝を切ったり支柱を建てたりして  
コバテイシを守りました。その後もコンクリ  
ート製の支柱が設置され、1991年には蘇生  
治療が行われるなど大切にされています。  
現在、樹勢(樹の生育状況)は保たれて  
いますが、幹の内部はほぼ空洞となってい  
ます。



県指定天然記念物

植物

中は空洞になっていますが、柱で支えて倒れるのを防ぐなど、とても大切にされていることがわかります。



## DATA

## 指定経緯

1970(昭和45)年7月14日、琉球政府指定「本部町の塩川」

本部町の塩川は、石灰岩の岩から毎分数トン〜数十トンの塩水が湧き出し、小川となって海に注いでいます。水中の塩分組成と海産プランクトンから水源のひとつが海であることが分かります。塩分濃度は海水の $\frac{1}{3} \sim \frac{1}{10}$ で、大雨の後は流量が増えますが濁水期でも涸れることはなく、海水に雨水と地下水が混合していると考えられます。

塩川は海面より高いところから海水が湧き出しており「水が低きに流れる」節理に反しています。地元でも昔から本部七不思議の一つに数えられ、羽地の海水が湧き出ているという伝説までありました。科学的には、

地中に海水と雨水・地下水が流れ込む空洞があり、比重の大きい海水が混合水を地上に押し出すとされます。この仮説では、空洞の位置が海面下70mより深くないと必要な圧力差を生じません。

生物学的にも面白く、動物ではチカヌマエビ、アシナガヌマエビといった地下水系に生息するエビの幼生が確認されています。植物も多様で、特に紅藻類のシオカワモッカは日本ではここだけに生息しています。



湧水口はふたつあり、この写真は南側のものです。





上空から見た塩川



塩川は湧水口から 300m 程流れて東シナ海に注いでいます。水中にはユゴイやミナミクロダイ等が泳いでいます。



降雨後の塩川 (2021年5月撮影)  
降雨後の濁りは以前からあり、1956年2月の聞き取り調査でも「暴雨の際は水量三、四倍増加し赤褐色の濁水を流すという」と記録されています。



# 嘉津宇岳安和岳八重岳自然保護区

指定年月日:1972(昭和47)年3月14日 所在地:名護市、本部町

DATA

## 指定経緯

指定時の名称:「嘉津宇岳植物群置」

1973(昭和48)年3月19日、追加指定、

現名称に変更

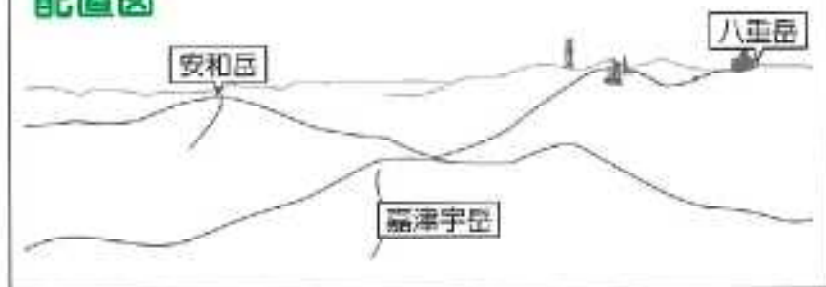
嘉津宇岳(標高452m)、安和岳(標高432m)、八重岳(標高453m)は本部半島の中央部にあり、本部町と名護市にまたがる山並みの主峰をなしています。ここは主に古生代から中生代の石灰岩やチャートでできていますが、一部に粘板岩や千枚岩もあり、複雑な地層となっています。そのため地形や地質の変化にともなって、生えている植物が変化する様子を見ることができます。この地域

の森には、カツウダケエビネやカツウダケカンアオイ、ヒナカンアオイなど植物地理学上貴重な植物がたくさん生えています。また、カラスバトやコノハチョウ、フタオチョウ、イボイモリなどの天然記念物に指定された動物たちの生息地ともなっています。



嘉津宇岳駐車場上空からの写真

## 配置図





勝山公民館駐車場付近からの上空写真（左上の奥に伊江島が見えます。）



高津宇岳の頂上から名護市街を望む



高津宇岳の頂上から八重岳を望む



高津宇岳林内の登山道の様子



コノハチョウ \*

セイタカスズムシソウ  
(コノハチョウの食草)



# 名護のひんぷんガジュマル

指定年月日: 1997(平成9)年9月2日 所在地: 名護市名護

DATA

学名 *Ficus microcarpa*

指定経緯

1956(昭和31)年10月19日、琉球政府指定「名護のひんぷんがじまる」

名称の由来は、地元で「ヒンブンシー」と呼ぶ「三府壁脈碑」が近くにあったからとも、名護の入口に立つ姿が**ヒンブン**のようだからとも言われます。このガジュマルは、1800年代後半までマツと一緒に生えていました。「名護の番所だんぢよ豊まれる松とがじまるのもたえさかえ」は、その姿を詠んだ琉歌とされています。「もたえさかえ」は「繁栄している」という意味で、一緒に生えている事は示していませんが、琉歌研究家の島袋盛敏(1964)は、「松とがじまるが抱き合いからみ合って、珍しい形をして茂り栄えていたのであろうと思われる」、「離れ離れに立っていた

のでは珍しくもおかしくもない」と述べています。間切番所がガジュマルの近くへ移ったのは1695年と言われます。そして、この琉歌は「琉歌百掬 乾桑節流」(1795年)に記されているので、歌の成立は1695～1795年の間ということになります。歌が初めて詠まれた時、すでに目立つ木だったはずなので、樹齡は少なくとも280年を超えるのではないのでしょうか。

国指定天然記念物

植物



名護のひんぷんガジュマル(南東側から望む)。  
ガジュマルの側には三府壁脈碑(復元)が立っています。

用語の解説

ヒンブン

屋敷の正面の門と主屋の間に設けられたびょうぶ形の塀。一枚岩や石垣、瓦石垣、生垣、竹垣、板垣などがある。



ヒンブン



# みやざとまえ うたき りん 宮里前の御嶽のハスノハギリ林

指定年月日:1973(昭和48)年3月19日 所在地:名護市宇宮里

名護市

DATA

学名 *Hernandia nymphaeifolia*

ハスノハギリの材は桐の木のように軽くて柔らかく、下駄やお面などの材料になります。果実は直径2cm程の大きさで、肉質半透明の「総苞」に包まれています。総苞には径1cmぐらいの穴があり、昔の子どもたちは、ここから息を吹き込んでプープー鳴らしたり、ホタルを入れてもう一つの総苞をかぶせて穴をふさぎ、提灯にして楽しみました。

名護市の城通りを西に進むと、市営テニスコートの隣にこんもりとしたハスノハギリ林が現れます。街中に森が残ったのは、旧宮里村の「前の御嶽」として守られてきたからです。神人が管理し、その他の人たちは枯木を拾うことも禁じられていました。

この林は、かつてビーチのアダン林のすぐ

後ろに位置していました。昼でも薄暗く涼しい海風が流れ、海水浴客が休憩する場所でしたが、ビーチは1972～1974年にかけての工事で埋め立てられました。今は渚から遠く離れていますが、昔の名護湾の景色や風がどのようなものだったかを私たちに語りかけています。



※

果実と総苞



林内の風景

写真: ※ 原口 寿夫



葉

※

県指定天然記念物

植物



# なごしかようそう しゅうきよく 名護市嘉陽層の褶曲

指定年月日: 2012(平成24)年9月19日 所在地: 名護市字天仁屋

名護市の東海岸には嘉陽層と呼ばれる砂岩と泥岩からなる地層が分布します。嘉陽層は、3000～4000万年前の海底堆積物が主体となっており、海洋プレートが沈み込むときに、海溝の土砂がはぎ取られてできる付加体です。なかでも名護市天仁屋からパン崎にかけて観察できる嘉陽層では、生痕化石と呼ばれる海底に生息する生物がはい回った跡の化石や地殻変動の証拠である地層の褶曲や逆転、断層を観察することができます。また、褶曲についても、パン崎では波長の短いくしゃくしゃに折れ曲がった褶曲、天仁屋からパン崎の中間地点付近では、崖いっばいに広がる大規模な褶曲を観察する

ことができます。

名護市嘉陽層の褶曲は、数多くの地学現象を狭い範囲で観察できる貴重なフィールドであるだけでなく、沖縄島の成り立ちを考え、大地の動きを実感できる場所です。



くしゃくしゃに折れ曲がった地層



※



褶曲：写真左下に写っている人と比べると、そのダイナミックさがわかります。

※※※



逆断層

※※



生痕化石：スピロラフェ

※※



生痕化石：パレオディクテオン

※※



生痕化石：コスモラフェ

※※※



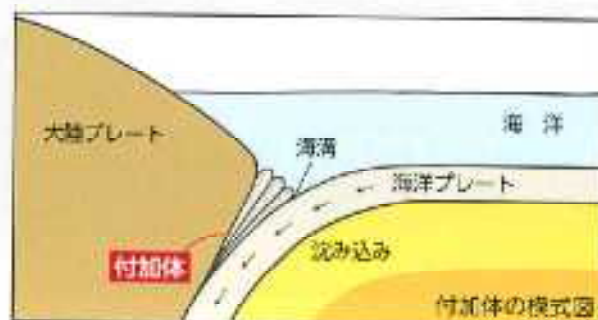
底仁屋の横臥褶曲

※※

### 用語の解説

#### 付加体

大陸プレートの下に海洋プレートが沈み込む際に、海洋プレートの土砂が、大陸側に押しつけられたもの。





# なごばんじょあと 名護番所跡のフクギ群

指定年月日: 1974(昭和49)年2月22日 所在地: 名護市字東江

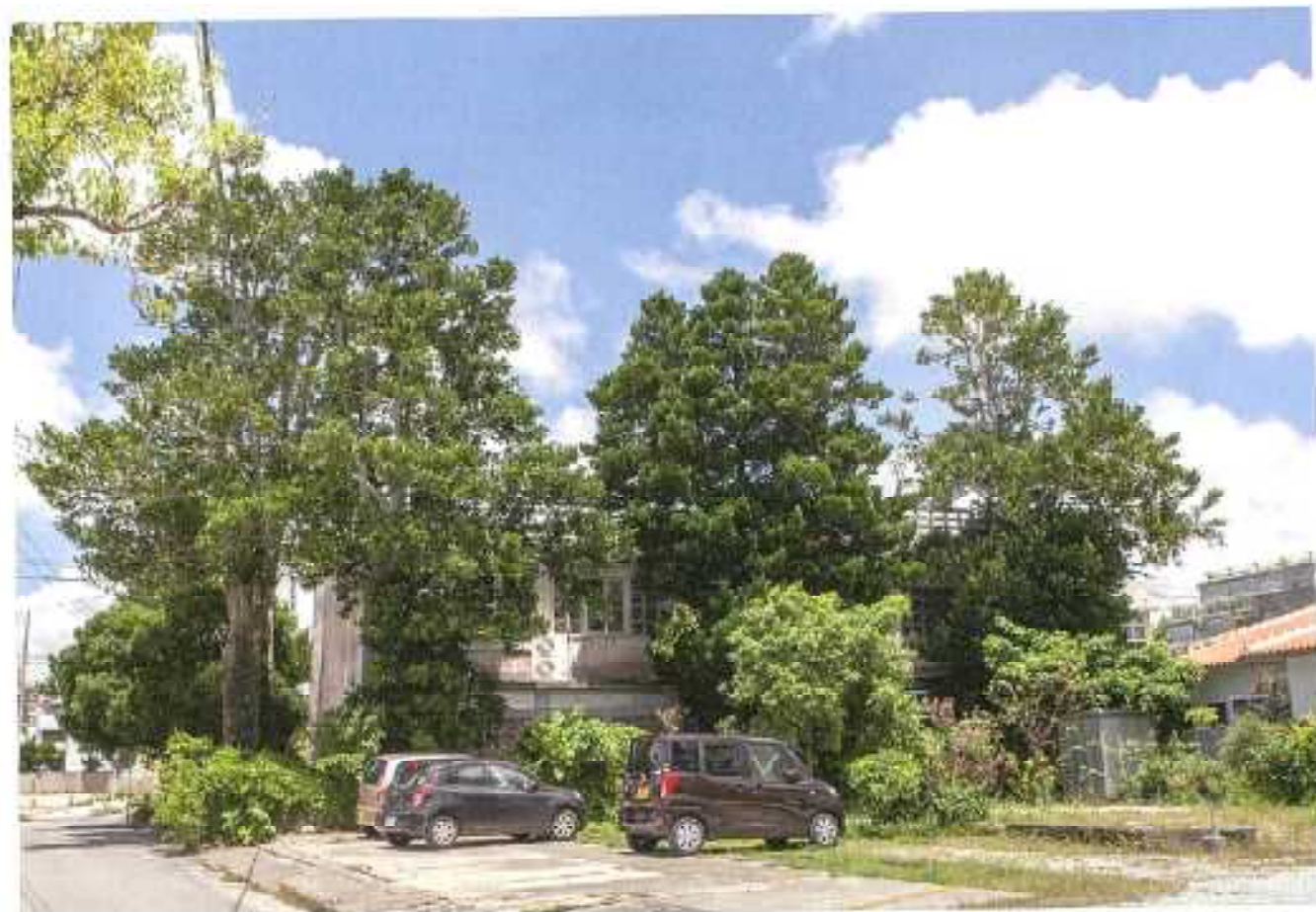
DATA

学名 *Garcinia subelliptica*

フクギはアフリカから東南アジアにかけて分布する木で、沖縄県での自生地は八重山諸島までと考えられています。防風林として優れ、建材、染料にもなることから、琉球国時代には、蔡温が植栽を奨励し、沖縄県内各地に広がりました。屋敷林のフクギはある程度の大きさになると建材用に伐られ、空いた場所に苗を補植することで維持されて来ました(仲里, 2011)。

フクギ群がある場所には、かつて名護間切の番所がありました。番所がここにできたのは1695年で、フクギはその時に植えられたと伝わっています。それが今まで残ってい

るとすれば、これらのフクギは樹齢320年以上ということになります。1700年代は番所の近くまで東湊に続く入江が広がっていました。やがて辺りは田んぼとなり、明治時代以降は旅館や商店が立ち並ぶ街に変わってきました。番所も村役場、町役場、市役所、博物館と変遷し、今また新たな時代を迎えようとしています。地域の移り変わりを見続けてきたフクギをこれからも大切にしていきたいものです。



名護番所跡のフクギ群(左からB・C・D・E)





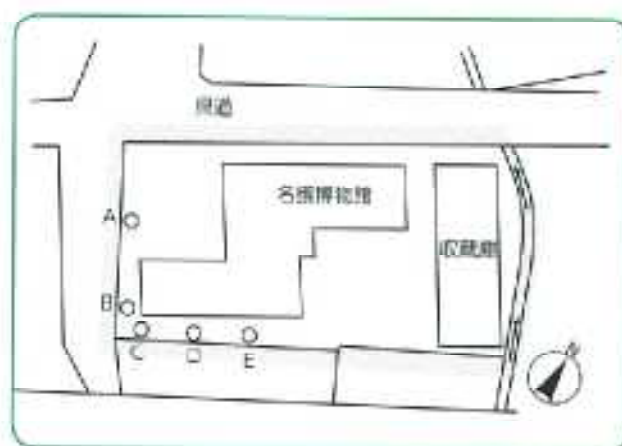
フクギ(手前よりD・E)の幹の様子。樹にある石垣は名護寺所当時のものです。



フクギ(B)



フクギ(A)



敷地内のフクギの配置図



# まんざもうせっかいがんしょくぶつぐんらく 万座毛石灰岩植物群落

指定年月日:1972(昭和47)年5月12日 所在地:恩納村字恩納

恩納村にある万座毛は大海に臨む断崖上の絶景地で、県指定名勝にもなっています。名称の由来は、尚敬王が巡行の際「万人をも座しむるに足れり」と称したためと言うのが通説ですが、東恩納寛惇(1950)は、方言の「マンヂャーモウ」について瀬良垣の満茶原、金武の波武謝原、各地の真謝など類型の地名が多数あることを挙げ、通説は王の随行者などによる作文の可能性があると述べています。このように景色が注目される万座毛ですが、じつは植物学的な重要性の面でも負けていません。

ここに生育するヒメスイカズラ、イソノギク、オキナワマツバボタン、オキナワスミレ、クニガミクロウメモドキ、ヒメクロウメモドキ、ハナコミカンボクは、琉球列島固有、沖縄島固有、そして香港と沖縄島のみに見られるといった分布上の特徴を持つ植物です。また、サクヤアカササゲやテンノウメなどの希少植物も多種生育しており、万座毛は貴重植物の博覧会場のような場所と言えるでしょう。しかし、その一方で、近年はツルヒヨドリなど外来植物の侵入もあり、適正な管理が必要になっています。



万座毛





コウライシシバなどが茂る広場



ヒメスイカズラ

\*



イソノギク

\*



オキナワマツバボタン

\*



オキナワスミレ

\*



クニガミクロウメモドキ

\*



ハナコミカンボク

\*



## 天然記念物と人

天然記念物とはなんだろう、とよく聞かれることがあります。天然記念物は、学術的・文化的な視点から天然（自然）を記念するもので、動物、植物、地質・鉱物、これらを含む天然保護区域として指定されます。つまり、私たちの宝物、財産なのです。それで文化財の一つとして保護されています。

天然記念物には、文化としての人との関わりが含まれます。事例としては、巨樹では首里登壇の大アカギ（国指定）、久米の五枝のマツ（国）、名護のひんぷんガジュマル（国）、伊平島島の念頭平松（国）、今泊のコバテイシ（県指定）、手根の大ソテツ（県）。並木では、真謝のチュラフクギ（県）、名護筆跡跡のフクギ群（県）、多良間島の抱護林（県）。家畜・家禽では、琉球犬（県）、宮古馬（県）、チャーン（県）などがそれにあたります。織名園のシマチスジノリ発生地（国）、仕島大石（県）などは歴史にもつながります。また、天底のシマチスジノリ（県）は、湧き水を利用して人々の暮らしともつながります。ここにあげなかった天然記念物でも人との関わりを垣間みるものがあります。植物として指定されている御嶽・首願などがそうです。ここは、心のよりどころとして地域の人々と深いつながりをもっています。

動物ではどうでしょうか。キシノウエトカゲは、宮古・八重山諸島各地において多様性に富んだ方言がみられます。宮古諸島では食の対象にもなったのですが、逆に八重山諸島では忌み嫌われたという話も出ます。地域によって接し方が違うのです。また、オカヤドカリ類は、人との

関わりが色濃く出てきます。今ではみられなくなりましたが、近代以前の成人女性の儀礼として手の甲に針突（入墨）をしていましたが、その中にオカヤドカリとされる模様がありました。ある老女は、自分たちの祖先だから、と話していました。きっと深い意味があったのでしょう。

天然記念物はみんなの文化財です。天然記念物を人との関わりという視点でみると、理解がさらに深まることでしょう。



古くから親しまれてきた名護のひんぷんガジュマル（上）と久米の五枝のマツ（下）（いずれも大正時代：坂口健一郎「沖縄写真集」第1号・第2号、1925年発行より）

# 伊平屋島の念頭平松

指定年月日:2016(平成28)年3月1日 所在地:伊平屋村字田名東原

伊平屋村

DATA

学名 *Pinus luchuensis*

指定経緯

1958(昭和33)年1月17日、琉球政府指定「念頭平松」

リュウキュウマツは、鹿児島県のトカラ列島から与那国島にかけて自生する琉球列島固有のマツで、分類学的には本州、九州、四国にかけて広く分布するクロマツに極めて近い種です。念頭平松は水平方向への枝の広がりやすさ、その美しさにより昔から名高いマツでした。

現地を訪れた国語学者の宮良當壯(1934年)は、「ニント松(寝ている松の義か)と云ふ。実に形の麗はしい笠のやふな松」と記しています。なお、「念頭」の由来について、宮良はこう述べましたが、今のところ定説はないようです。

『伊平屋村史』(1981年)には、念頭平松の由来に関する伝説が載っています。昔この場所には先代のマツがありましたが、それを山太筑登之という者が盗伐したそうです。その後山太が祟りで死んでしまったため、弟や親類がおわびとして植えたのがこのマツというお話です。1753年頃のことと言いますので、この伝説が正しいとすると念頭平松の樹齢は270年程度ということになります。

国指定天然記念物

植物



念頭平松のみごとな枝ぶり



# 伊平屋島のウバメガシ群落

指定年月日: 2021 (令和3年) 年3月26日 所在地: 伊平屋村字我喜屋ソーレン原

DATA

学名 *Quercus phillyreoides*

フェリーで伊平屋島の港に到着すると、正面に「虎頭岩」と呼ばれ親しまれている巨大な岩が見えます。その一帯には、まるで刈り込まれたように背の低い木がびっしりと生えみごとな景観をつくっています。この背の低い木がウバメガシです。ウバメガシは「備長炭」と呼ばれる質の良い木炭の材料として知られており、昔は伊平屋島でも人々の生活を支えてきました。

ウバメガシは中国大陸と日本の本州（神奈川県以西の太平洋側）、四国、九州に分布

しますが、沖縄県では伊平屋島と伊是名島のみで群落が見られ、日本の自生地での南限となっています。またDNAを調べたところ、本州や九州の集団とは異なる古いタイプであることがわかりました。この分析結果は、ウバメガシが中国大陸から沖縄を経て日本へと分布を広げた可能性があることを示しており、沖縄のウバメガシは生物地理学的、植物社会学的、遺伝学的に貴重なものです。



上空から見たウバメガシ群落



虎頭岩



ウバメガシ



# 田名のクバ山

指定年月日:1958(昭和33)年1月17日 所在地:伊平屋村字田名

「クバ」は中国南部、台湾、沖縄から四国南部にかけて自生する海岸植物で、和名では「ビロウ」と呼びます。沖縄では神が地上に降りてくる際の乗りどころと考えられていて、自生地が御嶽になったり、御嶽に植えられたりしています。葉は笠や団扇の材料になり、若芽は食用、幹は住宅の柱材になりますので、かつては実生活の面でも人との関わりが深い木でした。

伊平屋島の北端、字田名にあるクバ山は、山全体が数万本のビロウで覆われています。

タブノキ、トベラ、ホルトノキなども生えていますが、遠くからはビロウの純林のように見えます。ここにはミサチ御嶽があり、山全体が聖地になっています。1976年の山火事で全山が燃えましたが、1979年には焼け跡は見られるもののビロウ群落は回復していました。戦後、田名区では3日間だけ区民が葉を採ってよい日を決め、それ以外は立入禁止としましたが、1972年の本土復帰以降はその慣習も無くなりました。



クバ山全景



ビロウ



クバ山近景



# くまや洞窟

指定年月日: 1958(昭和33)年1月17日 所在地: 伊平屋村宇田名

伊平屋島北部に位置する田名集落の北側約4kmの海岸近くにあつて、急な斜面を階段で上ると狭い入口にたどり着きます。中は高さ10m、広さ600㎡ぐらいの大きなホールになっており、地面には海側から吹き上げられてきた砂がたまっています。この洞穴は、今から約2億8000万年前の層状チャートできていて、**海食洞**ができた後、土地が隆起したと考えられています。チャートは**放散虫**などの死骸が深海底に堆積したもので、二酸化ケイ素を主成分とし緻密で大変硬く

火打石にもなる岩石です。

江戸時代、藤井貞幹が「衝口発」(1781年)を著し、天の岩戸はくまや洞窟であるなどと主張しました。これに対して本居宣長が「鉗狂人」(1785年成立、1821年刊行)で徹底的に反論するなど、いろいろな人たちが巻き込んだ論争に発展しました。また、くまや洞窟には、山の反対側にある「西くまや」に抜けられるという伝説がありますが、1980年の調査では奥は行き止まりでした。



くまや洞窟のある丘。海から吹き上げられた砂が堆積しています。





洞窟内。砂が入り込んでいます。



入口。緑色のチャートの層が見えます。



内部。広い空間になっています。

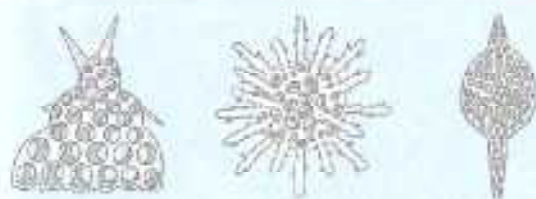
## 用語の解説

### 海食洞

波によって削られてつくられた洞穴。最初は小さくとも、長い時間をかけ、波で繰り返し削られることで深い洞穴が作られる。

### 放射虫

海にいるプランクトン的一种で、アメーバなどと同じ単細胞生物の仲間。ケイ酸質からなる堅い殻を持ち、死ぬとこれが堆積して地層を形成する。





# 伊是名城跡のイワヒバ群落

指定年月日: 1958(昭和33)年1月17日 所在地: 伊是名村字伊是名

DATA

学名 *Selaginella tamariscina*

指定経緯

指定時の名称: 伊是名城跡の「岩松の群生」

1975(昭和50)年8月7日、現名称に変更

イワヒバは、風が強く吹き付ける岩壁や、岩の小さなくぼみなどに生える葉の長さ20cmほどのシダ植物です。厳しい環境で生き抜くための工夫なのでしょう、乾燥してくると葉が内側に巻きこまれ、逆に水分が多くなると広がります。北海道から琉球列島、台湾、中国、インドネシアのジャワ島やスラウェシ島まで分布しています。沖縄では伊是名島の他に伊平屋島、久米島、慶良間諸島、石垣島、尖閣諸島の魚釣島などで見つかります。しかし特殊な環境に生えるため自生

地、個体数ともにごくわずかです。風が強く吹き付ける厳しい環境に生育する植物群集を研究する上で、ここは貴重な場所です。

なお、自生地の伊是名城跡は、伝承によると佐銘川(鮫川)大主が築いたとされるグスクで、三方が崖になっていることから、難攻不落のグスクであったとされます。



岩壁のイワヒバ



潤いた様子



乾燥して巻いた状態



# アカラ御嶽のウバメガシ及びリュウキュウマツ等の植物群落

指定年月日:1977(昭和52)年5月9日 所在地:伊是名村字伊是名

伊是名村

ウバメガシは、日本国内では本州（関東以西）、四国、九州、琉球列島に分布しているブナ科の硬葉樹で、風が強く吹き付け、栄養の少ない厳しい環境下で低木林を形成します。沖縄は分布の南限地域となっており、伊平屋島と伊是名島の群落の他、名護市に1本だけ見ることができます。伊是名のアカラ御嶽は昔から地元で大切にされてきた場所で、標高66mのチャートからなる丘の上にあり、その周辺のほとんどがウバメガシに

覆われた森となっています。御嶽のある丘の中ほどから下はリュウキュウマツの林ですが、ここのリュウキュウマツは強い風のため、高さが5mぐらいしかありません。また、ここには、オーストラリア系の植物で日本では沖縄の限られた場所에서만確認されていないイネ科植物のイゼナガヤも見られます。アカラ御嶽の周辺は、特殊な環境に生える植物の様子や、限られた地域に生える植物を研究する上で貴重な場所です。



指定地全景



他の植物があまり生育しない  
厳しい環境に生えています。



ウバメガシ近景

ウバメガシの実



県指定天然記念物

植物